



## 私の好きな重伝建 桐生新町重要伝統的建造物群保存地区

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**国**定駅から再びJR両毛線にのり、一〇分ほど揺られると桐生につく。絹織物の町として栄え、ノコギリ屋根の工場群でも有名だ。ノコギリ屋根は効率よく採光するための工夫で、日本では明治になって導入された。三角屋根がノコギリの歯のように連続し、それぞれの短辺が採光用の窓となっており、主に北向きに造られているという。これは南向きだと光量が安定しないからだそうで、そのあたりに注目してみようと思いつきながら、駅でもらった観光パンフを見ると、重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）の説明が大きく載っていた。駅からさほど離れていない本町一丁目及び二丁目の全域と桐生天満宮境内までが重伝建に選定されている。

持参した地図に、そんな記載はまったくない。観光パンフに選定年月は書かれていないが、つい最近のことだろう。しかし、少し離れた富岡製糸場の世界遺産登録ほど、重伝建の選定は話題性がないせいか、観光客の姿はない。それどころか、通行人もほとんどいない。ゆっくり町歩きを堪能できそうだが、桐生の重伝建は、かつて桐生新町という町名だったことから、「桐生新町重要伝統的建造物群保存地区」という。町の起りの年代は、三つの説があつて甲乙つけがたいらしく、大抵は真ん中の年をとつ

て「天正十九（一五九一）年」としている。北端の桐生天満宮を起点に、約一〇メートル幅のメイン通りを南へ向かって通し、その両脇に間口約一三メートル、奥行約七〇メートルという短冊状の敷地割りとなされた。しかし、もう重伝建に入っているはずだが、メイン通りの左右には木造の建物、赤レンガの建物、蔵どうみても普通の店舗などが立ち並び、町並みとしてのまとまりがない。

メイン通りは片側一車線の車道が多くを占め、歩道はせまく、一般道としかいいようがない。さらには電柱も建ち並んで、空には電線が張り巡らされている。いったいどのあたりが評価されている重伝建なのだろうか。

いくつか資料を見ると、この地区は明治から昭和初期の「様々な建物が建ち並び町並みを形成している」とある。たしかに、そのとおりで一貫性がない。また草創期の町割りがそのまま残されていることも貴重らしい。そして、もうひとつ、建物がみなメイン通りに対して斜にかまえているのも特徴だという。正直、これにはまったく気がつかなかった。

重伝建の北端にある桐生天満宮にたどりつくと言明板があつた。それによれば、選定年月は平成二十四年七月なので、まだ日が浅い。これから他の重伝

建のように整備し、観光資源として充実させてゆくのだろうか。私の意見をいえば、あまりいじってほしくない。重伝建に選定された町並みにもかかわらず、へたに観光地化しておらず、地域の人が普通の暮らしを営む雰囲気が素晴らしい。このままだと集客力は弱いだろうが、私のような人間にはそれも好都合となる。どうかいつまでも変わらぬ姿で、また私を迎えて欲しい。



重伝建の町並み

【交通】JR両毛線 桐生駅から徒歩約20分